

〔25〕 フィリピの信徒への手紙 3章 12-14節
「キリスト・イエスに捕らえられている」

《1》

パウロは、主イエス・キリストを知ることのあまりの素晴らしさゆえに、今では他の一切を損失と見ている；キリストのゆえに失ったすべてのものは、塵あくたに過ぎないと見做していると、語りました。

信仰をもって主イエス・キリストと共に生きることの幸い、素晴らしさは、何ものにも変え難いものとなっています。

このように、信仰に生きることについてパウロは語るのですが、それは、どのような生き方でしょうか。

電車に乗ることで喩えれば、信仰は決して駅への入場券を手にした、ということではありません。その駅に留まっているだけでは、あまり意味がないのです。あるいは切符を買って、どこかの駅まで電車に乗る資格を手にした、というだけのことではない。目的地へ行くことが大切です。

こんなことはわかり切っていることです。実際に電車に乗って、どこかへ行くことに意味があるわけです。こんなにも、すぐわかることですが、信仰においては、入場券や切符を買って、それだけで満足してしまっているようなことが起こりえます。

自分は救われたのだから、ということで、まるで或る資格を得たかのように考える。あとの人生は自分の好きなように生きていけばよいのだ、とでも考えているかのよう生きる。

そのような生き方は、決して主の救いにあずかった信仰者の生き方ではありません。。そのような趣旨のことを、パウロは前回の終わりの個所で、こう述べていました。

3章 10-11節です。「私はキリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」。

最終目標は、死者の中からの復活です。これは終わりの時に起こることであり、救いが完全なものとして最終的に完成する時。まさに私たちが、心からの喜びをもって迎える時です。このような復活へと達したい。

そのためには、主の苦しみにあずかり、主の死の姿にあやかる（同じ形となる。同じような生き方をする）ことも厭わない、ということです。もう、救われているのだから、これですべてよい、というのでは無いのです。

また決して、ところてん式に救いが完成されるというのではない。ぼうっとして、イエスさまや聖書や信仰のことなど何の関係もないという生き方をしている、洗礼さえ受けていれば、それでよいということではありません。

もちろん、洗礼を受けていることはとても大きなことですが、大切なことは、洗礼を受けたなら、受けた者として、ふさわしい大切な生き方がある、ということです。

そのような生き方には、苦しみも伴うことになる。もちろん、進んで苦しみを求める必要はないし、場合によってはそれは不信仰に近いものになってしまうかもしれません。

しかし、キリスト者がキリスト者として生きていくとき、どういう形になるかは人さまざま、状況はいろいろあるでしょうが、何らかの痛みを受けることは、確かでしょう。

そしてそのような時、信仰者として生きるべきその生き方から、外れてしまっただけではない。その生き方ということですが、自分はどうか生きていくか。このことを、今朝の個所でパウロは語るのです。

なお、今、痛みと言いましたが、痛みのとき私たちがいつも覚えていたい御言葉があります。コリントの信徒への手紙二 4章 8-9節です。

「私たちは、四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」。

フィリピに戻って 3章 12節「私は既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません」。

それを得ているということ、完全な者になっている、というのは、ほぼ同じようなことを意味しているでしょう。

つまり、信仰において既に、自分は完全な者となっている、完璧な非の打ちどころのない信仰者となっている、といったような意味でしょう。

当時、このようなことを主張する信仰者たちがいたようです。普通の人たちには知られていない、或る神秘的な知識にあずかっている自分は、格別な信仰深き、完成者である、というようなことを言っていたようです。

しかし、パウロは主イエスの教えはそのようなものではない、それは正しい信仰ではない。信仰者は、この世の生涯を歩む限り、完全になることはないと言うのです。

彼らを意識してパウロは、自分が既に得ているわけではないし、完全になっているわけでもない、と語っているのでしょう。自分は、彼らとは違うというわけです。

では、「それを得た」と言われている「それ」というのは何か？ 文章のつながりから言えば、直前で言われている「死者の中からの復活」のことかとも思われます。

しかし、こここのところは原文では「それ」という言葉はありません。「私は既に得たというわけではない」というのが、原文どおりの言い方です。

ですから、ここでの「それ」というのはもっと広く、いわば信仰生活において目標とすべき諸々のこと、と言ってよいかもしれません。

とにかく、自分は信仰において、未だ完全な者とはなっていない。自分が完全な者であるというようなことは誰も主張できないはずだ。

なぜなら、確かに、信じたその時に確実に救われている。これは確かです、ですから、それは信仰における「既に」です。しかし、信仰者には、歩むべきこの世の生涯がある。終わりの時を目指していますが、その終わりの時はまだ来ていない。ですから、これは信仰における「未だ」です。

この「既に」と「未だ」の間を、信仰者は生きるのです。救いは確かなのですが、その救いのために、この世の歩みにおいても励むのです。

「何とかして捕らえようと努めているのです」。これが、「未だ」を生きる私たちの生き方です。

「自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです」。捕らえよう、とするその姿勢は、決して自分の力で頑張る。どうかかしよう、というのではありません。

神さまの恵みが、私を捕らえている。だから、主とその恵みに委ねて、御霊の導きのままに、励んでいこうというのです。

《2》

13 節は、「兄弟たち」という呼びかけの言葉で、始まっています。ここには、兄弟たちよ、あなたがたもぜひ、こういったことを自分のこととして、よく考え、確かな信仰に生きてほしい、というパウロの願いがあるでしょう。

そして、この 13 節と 14 節は内容的に、12 節のさらに詳しい説明となっていると言えるでしょう。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、……ひたすら走ることです」。

パウロの好きな競走の譬えが、ここにもあります。因みに、ほかの個所で、競走の譬えを用いているものとして、コリントの信徒への手紙一 9 章 24 節を一例として挙げましょう。

「あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい」。

さて、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、ひたすら走る。ここには、ひたむきに信仰に生きることに集中して、ほかのものに気を取られず、気が散らず、ただ夢中になって走っている姿が、浮かんできます。

「後ろのもの」というのは、例としてパウロ個人の具体的なことで言えば、3 章 4 節以下で述べていた肉の誇りのことも、その一つでしょう。八日目に割礼を受け、イスラエルの民、ベニヤミン族の出身…、とっていました。

それだけに限らず、人が誰でも持っている過去の出来事もそうです。辛かったこと、残念なこと、後悔しているようなことなど、いろいろあるでしょう。また、嬉しかったこと、やり遂げたこと、自慢したいことなども、あるでしょう。

しかし、そういったことを忘れる。記憶として忘れる、というよりも、今の自分に関わりを持つこととして、そのようなことにいつまでもこだわっていないということです。

そうではなく、「前のものに全身を向ける」。前のものというのは、言うまでもなく将来のことです。

では、将来に何があるのか。それはこの後の 14 節でさらにもう少し詳しく書かれています。

その前に覚えておきたいのは、私たちが前のものに向かって全身を傾けることができるのは、まず私たちが主イエス・キリストによって捕らえられているからです。

主イエス・キリストとの交わり、主とのつながりがなければ、私たちは自分の力で頑張るしかない。そして、そのような試みは必ず挫折するでしょう。

主がまず恵みをもって私たちを力づけ、励ましてくださるので、私たちは前に向かって、力強い歩みを重ねていくこともできるのです。すべては、神さまの恵みです。恵みが、まず私たちを覆っています。

ヨハネの手紙一 4 章 19 節「私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです」。

愛する。神さまがまず、恵みのうちに私たちを愛してくださった。信仰を与えてく

ださり、救いの恵みのうちに堅く捉えてくださいました。

ですから、その恵みのうちに、私たちは何でも、自由に、感謝して、喜んで、行うことができるのです。

《3》

そして 14 節です。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」。

ここに、将来に何があるのか、と先ほど言ったことの答えがあります。「賞を得ること」です。

そのために目標を目指してひたすら走る。競技において競走者が目指すのは、言うまでもなくゴールのテープです。この目標は、信仰においては、地上の歩みをその最期の一瞬まで信仰をもって走り抜くことでしょう。

そのような姿は、ヘブライ人への手紙 12 章 1 節で、こう言われています。「こういうわけで、私たちがまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」。

そして、走ること。それは神さまが下さる「賞」を得るためです。

では、この「賞」とは何なのか。いくつかの考えがあり、結論から言うと、ある説では主イエス・キリストがそうである、と考えています。

これによって、主イエス・キリストと一つとされることが完全に実現されると言われている、と考えるわけです。

或いはこれを、命の冠のことだと考える考え方もあります。参考にすべき御言葉として、例えばコリントの信徒への手紙一 9 章 25 節。

「競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を得るために節制するのです」。

また、テモテへの手紙二 4 章 7-8 節「私は戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走り通し、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです」。

義の栄冠とありますが、そのように言っても、命の冠と言っても、同じことでしょう。

さらに、このところは、“神さまが私たちに上へと召して、そして何らかの或る賞を与えてくださる”というような言い方になっていますが、原文はむしろ、“私たちに上へと召してくださること自体が賞である”と解釈することのできる（そのほうが原文に忠実とも思える）言い方になっています。

そうであれば、この「賞」というのは、「上への召し」ということになるでしょう。

或いは、もっと広くですが、いわば救いの完成、といったことが賞であるとも考えることもできそうです。

難しいところですが、これは何も一つに絞って考える必要はなく、今挙げたようなことがすべて含まれている、と考えてよいのではないのでしょうか。

主イエス・キリストと完全に堅く結ばれるのです。そして、命の冠を受ける。上へ、天へと召してくださり、完全に天にある神の国の一員とされる。そのようにして、救いは完全な姿で実現され、完成されるのです。

私たち、主イエス・キリストを信じて、主と共に歩む者には、これらのことが堅く約束されています。

完全な実現は、後のこと、未だ無いことです。しかし、神さまの恵みのうちに、その完成を目指している今、既に確かな救いと命に生かされています。そのような者として、私たちはこの世の歩みを走り続けています。

どうか主とその御霊が、さらに私たちに力を与え、私たちを助け、強め、導いてくださいますように。

私たちが主と共にあって完全にふさわしい信仰者として、最後まで守られ、整えられますように。お祈りします。

2022年5月1日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

パウロをはじめ私たちを捕らえ、恵みのうちに生かしてくださるあなたの、愛と恵みと御力を讃美いたします。

パウロは、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、ひたすらにこの世の生涯を走り抜きました。あなたが彼を捕らえ、強め、導いてくださいましたから、パウロはそのような歩みを全うすることができました。

神さま、どうか私たちも主と主の御霊によって捕らえられている中で、いよいよ信仰の歩みを力強く、走り続けていくことができますように。

賞として与えられる、主イエス・キリストと完全に一つとされること、命の冠を受けること、栄光の御国の一員とされること。このような幸いの中で、いつまでも命のうちに生かされるという約束に堅く留まって、絶えず主を見上げつつ、この世を走り抜けていくことができますように。

どうか、主がすべてを支え、導いてください。

御手に委ね、感謝して、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司